



▶高知県高知市▶1949年新制高知大学として設立。2003年高知医科大学と統合
 学生数/約5400人 学部/人文社会科学、教育、理工、医、農林海洋科学、地域協働
 大学院/総合人間自然科学
 ▶THE世界大学ランキング2019/801-1000位

Case Study

可視化を通じた地域人材育成

↓地域の関係機関と評価指標を共同開発

高知大学

「地域協働による教育」を推進している同大学。高校や企業の視点も取り入れた能力指標を開発し、地域とのつながりの中で学生の能力伸長を図る。



副学長(教育担当) 大学教育創造センター長
 教育学部 教授 小島郷子

こじまきょうこ ●福岡教育大学大学院教育学研究科修士課程修了。教育学修士。1994年4月、高知大学に兼任。2016年から副学長、大学教育創造センター長を務める。専門は家庭教育学。

地域社会の力を借りて 地域人材を育成

高知には地域の課題と向き合える現場が豊富にあります。本学ではそうした環境を生かし、「地域協働による教育」を掲げて、地域を主導する人材の育成に全学で取り組んでいます。

地域の課題を解決するには、学生自らが率先して周囲に働きかけていく必要があります。そのため、さまざまな知識や能力を身に付けるだけでなく、それらを統合し、活用して他者に働きかける力が求められます。また、地域人材の育成には、地域社会の力を借りながら取り組むことが欠かせません。

こうした考えのもと、文部科学省大学教育再生加速プログラム(AP)のテーマV「卒業時における

る質保証の取組の強化」事業などを中心に本学では、学修成果の可視化や評価の充実に取り組んできました。

ディプロマ・ポリシーを 10+1の能力に分解

学生の成長を検証する評価指標の柱が、ディプロマ・ポリシーに沿って設定した*「10+1の能力」です。10の能力は「対課題」「対人」「対自己」の枠組みの中で、全ての学生が修得すべき能力として本学が定義したものです。そして、この10の能力を統合し、他者に働きかける力が+1の「統合・働きかけ」の能力です。具体的には知識・技能を状況に応じて使いこなす力です。

学生の能力を評価するループは、本学教員だけでなく、

高知県教育委員会や地域の企業人もメンバーの「多面的評価指標開発研究会」で検討し、地域や企業での評価のしかたを取り入れていきます。社会で求められる能力を養成するための可視化なので、地元の見解は重要です。

この指標により学生は、1、3年次に実施する教員との「リフレクシオン面談」で、自分の能力の到達度を確認します。面談では、ルーブリックに従って実施した学生の自己評価と教員による他者評価のすり合わせを通じて、成長度合いや課題を共有し、次に何を学ぶべきかを一緒に検討します。

学生の自己評価能力を育成することも面談の狙いの一つです。これは、研究会で企業人から「社会では自分の能力や置かれた状況を客観的に見る力が欠かせない」との意見を反映させたものです。

多くの学生は自己評価に慣れておらず、教員の評価としばしば食い違っています。面談を通して、適切に自己評価できるように学生を支援しています。面談することの負担はありますが、少人数教育の中で学生の成長を実感することが教員のモチベーションになっています。

なお、地域社会で役に立つ能力の学修成果は、実際には卒業後にわかるものです。そこで、大学に対する満足度や成長の振り返り、社会での役立ち度などを把握する卒業生調査や卒業生就職先調査を実施し、検証を行っています。

AP事業を通して、学内に可視化そのものではなく、その先を大切にしている姿勢が根づいてきました。今後も、地域協働を中心とする教育によって、めざす人材像の実現に取り組んでいきます。

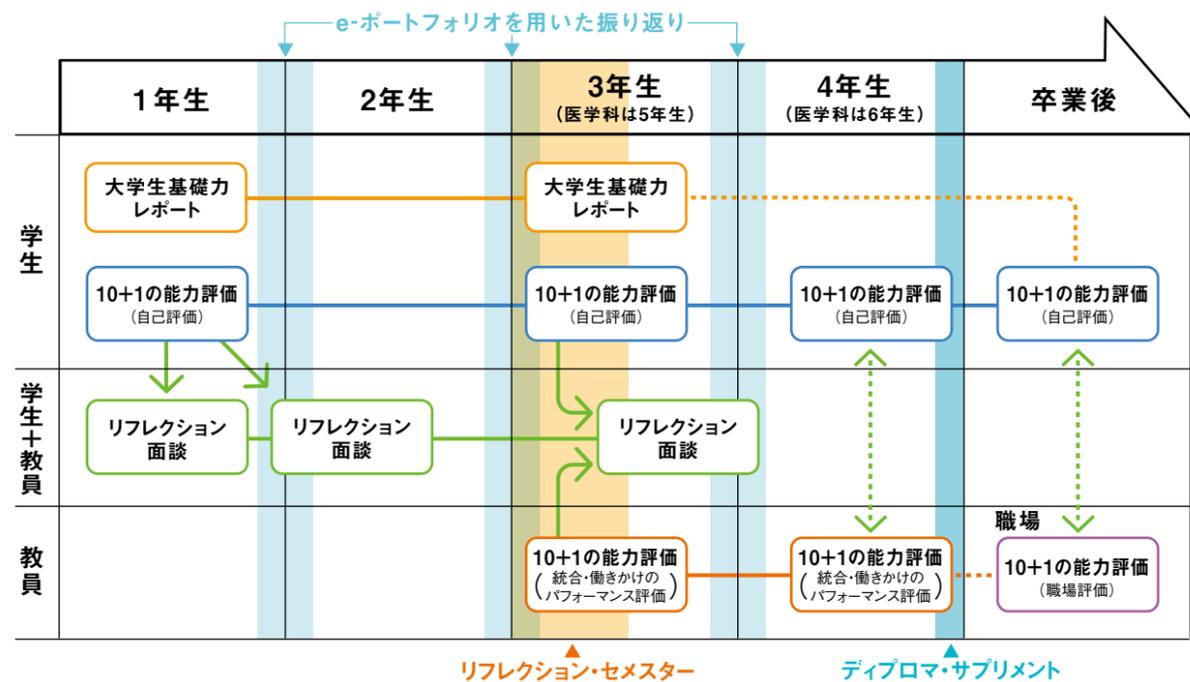
可視化の目的

- ▶地域協働を中心とする教育によって身に付けた諸能力が学生自身の内部で統合され、世の中に働きかける汎用的な力となることをめざす。
- ▶学生と教員が学生の成長を共有し、次の学びを共に考える。

組織・体制

- ▶理事(教育担当)・副学長を本部長、各学部長を委員とする「大学教育再生加速プログラム事業実施本部」がAP事業を推進。評価方法の検討は「大学教育創造センター」が担当。「多面的評価指標開発研究会」で地域や社会のニーズを聴取し、施策に生かす。

可視化のしかた



注目!

e-ポートフォリオを 学生とのコミュニケーションツールに

全学生が入学直後から活用するe-ポートフォリオには、履修状況、各授業科目の成績、GPAの推移が表示され、学生生活(サークル、ボランティア等)の記録、希望進路、取得資格、目標と振り返りを入力できる。授業科目の成績は履修者の成績分布と共に表示され、自身の位置を確認できる点特徴だ。

リフレクシオン面談では、学生の自己評価と教員による「統合・働きかけ」の他者評価を基に学びを振り返っている。評価にギャップがあれば、教員は「なぜこの評価なのか」を学生に説明し、アドバイスを。

学部独自の項目を追加できる機能を活用して、授業アンケートをはじめとする学生とのコミュニケーションなどにも幅広く活用されている。その結果、学生の利用率は100%に近いという。



▲e-ポートフォリオの評価画面。学生と教員がそれぞれ該当する評価段階に印をつける。

*専門分野に関する知識/人間の文化・社会・自然に関する知識/論理的思考力/課題探求力/語学・情報に関するリテラシー/表現力/コミュニケーション力/協働実践力/自律力/倫理観/統合・働きかけ